

平成 16 年 9 月 25 日

平城第 374 次調査（国指定名勝旧大乘院庭園）現地説明会資料

奈良文化財研究所平城宮跡発掘調査部

1. 調査の経緯

奈良文化財研究所では、旧大乘院庭園を管理する（財）日本ナショナルトラストの委嘱を受け、本庭園の復原整備に向けた資料を得るため、平成 7 年度から継続的な発掘調査を実施しています。発掘調査は、本庭園の中心である東大池の岸辺に沿って進め、平成 10 年度からは東大池の西側を対象として、西小池跡地、ならびに御殿跡の調査を行っています。

今回の調査は、西小池中央部が推定される地区（北区・約 510 m²）と、昨年度、江戸時代の岸の下層において平安時代とみられる遺構を部分的に確認した東大池西南隅部（南区・約 170 m²）で行っています（図 1）。北区は、近代に埋め立てられた西小池の実態を解明することを目的とし、南区は、前回検出した下層遺構の時期と範囲の確定を目的とします。

調査は 7 月 26 日より開始し、現在も継続中です。

2. 旧大乘院庭園について

名勝旧大乘院庭園は、平城京左京四条七坊十三・十四坪、現在の奈良市御所馬場町に位置します。大乘院は、一乗院とならび両門跡と呼ばれた興福寺の門跡寺院です。寛治元年（1087）に、興福寺の北方、現在の奈良県庁舎のあたりにおかれますが、治承 4 年（1180）平重衡による南都焼討によって焼失し、その翌年に元興寺の子院である禅定院がおかれていた現在の場所に移転しました。

その後、宝徳 3 年（1451）の火災で堂舎の大半を焼失し、翌年より尋尊によって、建物と共に庭園も復興されます。この時、庭園の作庭を任されたのが善阿弥でした。善阿弥は、室町時代を代表する作庭家で、足利義政に仕え、京都の慈照寺（銀閣寺）の庭園も彼の手によると言われていいます。そして、江戸時代に入り、手を加えられつつ、廃仏毀釈によって大乘院が廃される明治時代初頭まで、大乘院庭園は「南都随一の名園」と謳われました。各時代の庭園の実態は、池の有無、形状、構造など、現在も不明な点が数多く残っています。

明治時代に入ると、池の西方の御殿は学舎として利用されましたが、取り壊され、明治 16 年に飛鳥小学校が建設されます。明治 33 年に飛鳥小学校が当地より移転し、一時期荒地となりましたが、明治 42 年に奈良ホテルが開業し、テニスコートなどが造られました。昭和 33 年には国鉄の宿泊施設が建設されましたが、平成 15 年の名勝追加指定にともない撤去され、現在に至ります。

3. 調査の成果

<北区>（図 6）

江戸時代に描かれた『大乘院四季真景図（以下『四季真景図』）』（図 2）では、東大池の西に、変化に富んだ景観を持つ「西小池」が描かれています。しかし、現在は埋め立てられ、入り江状の窪地を残すのみです。北区は、この「西小池」と西方の陸地部分の確認を目的とします。

今回の調査では、複雑な汀線を持つ池と、池内の大小二つの島、岬などを検出しました。これ

らは、『四季真景図』の他、江戸時代の絵図を模写した『興福寺旧大乘院庭園図』（図 3）をあわせ検討すると、西小池中央部と、池の中央に位置する「ヲシマ」と称される島、「ヲシマ」の南西に位置する小島、その対岸の岬に相当します（図 4・5）。

また、庭園の西側は、文献史料や絵図などより、各時代を通して御殿などの建物群が存在していたことが知られていますが、これらについては現在検討中です。

【主な遺構】

（1）室町時代の遺構

・井戸…内径約 0.5m の石組の円形井戸。埋土から室町時代の土器が多量に出土しており、遅くともこの時代までに取り壊されたと考えられます。

（2）江戸時代の遺構

・西小池…東西両岸、大小二つの島、石溜まり、など、西小池を構成する遺構を検出しました。

東西岸間約 15m、南北は調査区外へ続きます。池底は地山を削りこんで造成しており、水深は岸と池底の関係をもとに、約 0.2m 以上と推定されます。地山が礫層となる部分では、これを池底の礫敷きに見たてており、一部白玉石を敷いています。

西岸は、調査区の北部で西に入り込み、南部で東に回り込んで舌状の岬を形成します。東岸は、中央部で方形に張り出し、東西両岸とも複雑な汀線を持っています。西岸が、緩やかな傾斜で立ち上がるのに対し、東岸の勾配は急で、高さ約 1m の崖状であったと考えられますが、近代の削平を大きく受けており、本来の形状は不明です。東西両岸とも護岸の石をめぐらせ、数箇所岩島状に石が集中するところも見られます。池の堆積土上面には、本来石組に使用したと思われる多量の石が認められました。

池の埋め立て土を観察したところ、南から順に埋め立てている状況が確認されました。また、この埋め立て土の上面から、飛鳥小学校に関連する遺物が出土しており、西小池中央部は、明治 16 年の飛鳥小学校建設にともない、南から順次埋め立てられた可能性が高まりました。なお、西小池北部は、小学校のおかれていた時代には、池として開いていたことが 2002 年度の調査で確認されています。

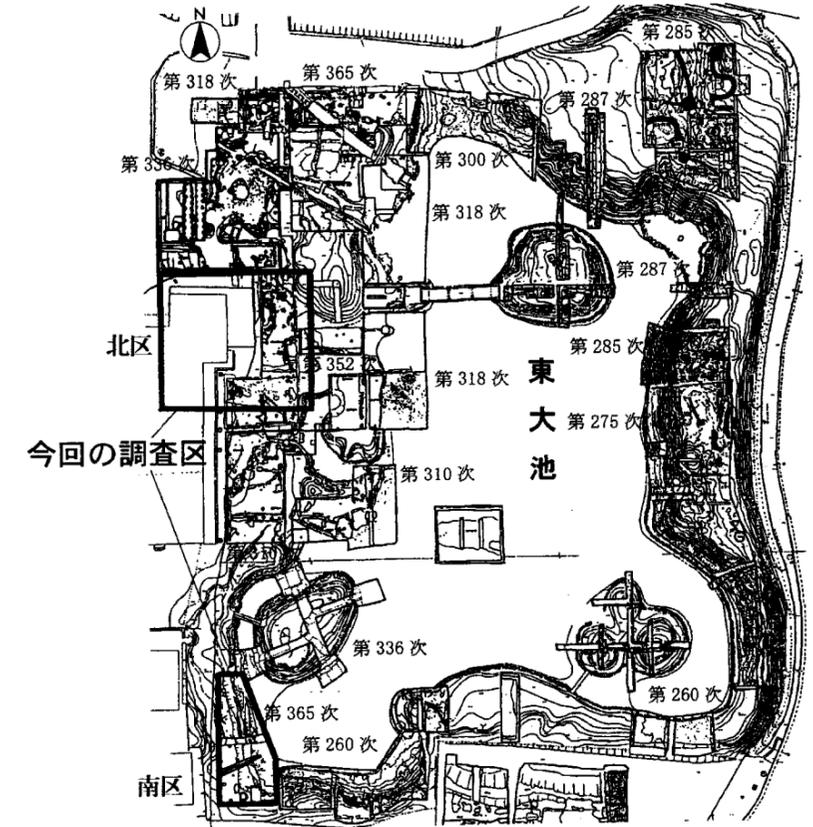


図 1 調査区位置図

- i 「ヲシマ」…南北約 9m、東西約 5m の島。『四季真景図』に描かれた「ヲシマ」に相当します。東半を検出した 2002 年度調査とあわせ、島の全体が判明しました。半球状に地山を削り残し、さらに上に土を積み造成しています。池底からの高さは約 0.4m。周囲に石を巡らし、一部に石が集中するところが見られます。北および東岸では基底部に石や土を押さえるため長さ約 1.7m の木材を多角形になるように並べ、杭ではさみ固定しています。
 - ii 小島…南北約 2m、高さ約 0.3m の小島。東半は近代のコンクリート基礎によって壊されていました。「ヲシマ」と異なり、粘土質の盛土によって造成しており、2 つの島は造成時期が異なる可能性があります。島の周囲には護岸の石を据えています。
 - iii 石溜まり…「ヲシマ」南端より舌状の岬の方向に、割り石が集中している石溜まりを検出しました。南端は近代のコンクリート基礎によって壊されています。『四季真景図』では、「ヲシマ」、小島、岬それぞれの間に、「連リハシ」と書かれた石橋が描かれています。検出した石溜まりが、この「連リハシ」に相当する可能性もあります。
- IV 魚溜まり…池の北部で、池底を深さ約 0.3m に掘り窪めた遺構を検出しました。南北約 4.5m、東西約 3m の楕円形で、周囲を 22 本の杭と竹のしがらみで囲んでいます。堆積土からは、蓮の実や、その他の植物遺体を出土していますので、植栽地を兼ねた、池の清掃時や避暑・避寒の際の魚の溜まり場所と考えられます。

(3) 近代の遺構

・井戸…内径約 0.8m の石組の円形井戸。石組の上端から約 0.4m の位置で、南へ続く土管を組み込んでいます。石組は更に深く続き、深さは不明です。この井戸の約 3m 南に、ほぼ同規模の土坑を検出しています。周囲を石・瓦・漆喰で固め、中央に漆喰製の長辺約 0.7m の枳を据えています。これら 2 つの遺構の関係は現在調査中です。

<南区> (図 7・8)

南区は、東大池の西南隅部です。2003 年度、近世の遺構面確認後、下層で礫敷と見られる状況を確認し、近世以前の池の遺構である可能性が指摘されました。

今回は、一部を面的に調査し、礫敷の広がりや時期の特定を目的とし調査を行いました。

【主な遺構】

(1) 石組み遺構…池岸に直行する方向に並ぶ石列を確認しました。一石約 0.3m。用途は不明です。なお、この石組みが据えられた面より上では、江戸時代の遺物が出土するのに対し、下層では確認していません。

(2) 礫敷遺構…3~5cm 程度の小石と、拳大ほどの石からなる礫敷。現状では、調査区の中央部で確認しています。礫敷には 12 世紀前半の土器が含まれており、大乘院移転以前の池底の礫敷と考えられます。

4. 出土遺物

7 世紀後半から近代に至る遺物が出土しています。

(1) 土器・土製品…「中御門」「大」などと墨書された江戸時代の土師器皿や、陶磁器などが注目されます。

(2) 瓦類…室町時代～江戸時代の軒瓦、鬼瓦、獅子口、鳥衾、棟込瓦、熨斗瓦や、明治時代のスタンプ付レンガなど。

(3) その他…刀子、煙管など金属製品、銭貨、飛鳥小学校時代の石筆、石盤、硯など。

5. まとめ

今回の調査の成果を以下にまとめます。

(1) 西小池の実態が明らかになった。

今回、西小池中央部は、複雑に入り組んだ汀線を持ち、東西両岸の勾配が異なり、中島や岩島を伴う、変化に富んだ景観を呈していたことが確認されました。

今回までの調査で、西小池については、南西の一部を除いてほぼ完掘したことになり、その全体像がより具体的に明らかになりました。西小池は、3 つの異なる形の池をつなげたような形状をしています。南北約 60m、東西約 30m の大きさで、中島、岬、州浜、岩島などによって構成されていました。その他、池内に設けられた魚溜まりや、池の造成に関したことがらなど、『四季真景図』には表れない部分も判明しました。

明治時代の西小池の埋め立てに関しても、今後の調査につながる新たな知見が加わりました。

(2) 東大池西南部で、大乘院移転以前の庭園遺構を検出した。

江戸時代の岸の下層で、12 世紀前半の池底の存在を確認しました。これは大乘院移転に先行する庭園遺構の可能性が高く、さらに慎重に調査を進めていきたいと思えます。



図2 『大乘院四季真景図』(興福寺蔵)

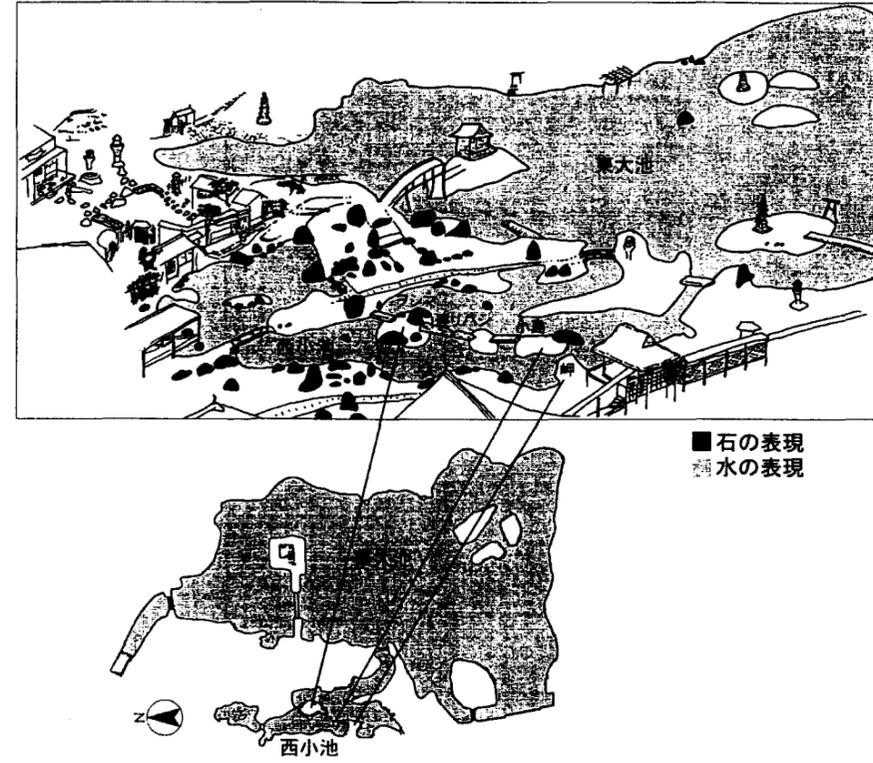


図4 『四季真景図』及び『興福寺大乘院庭苑図』の対照

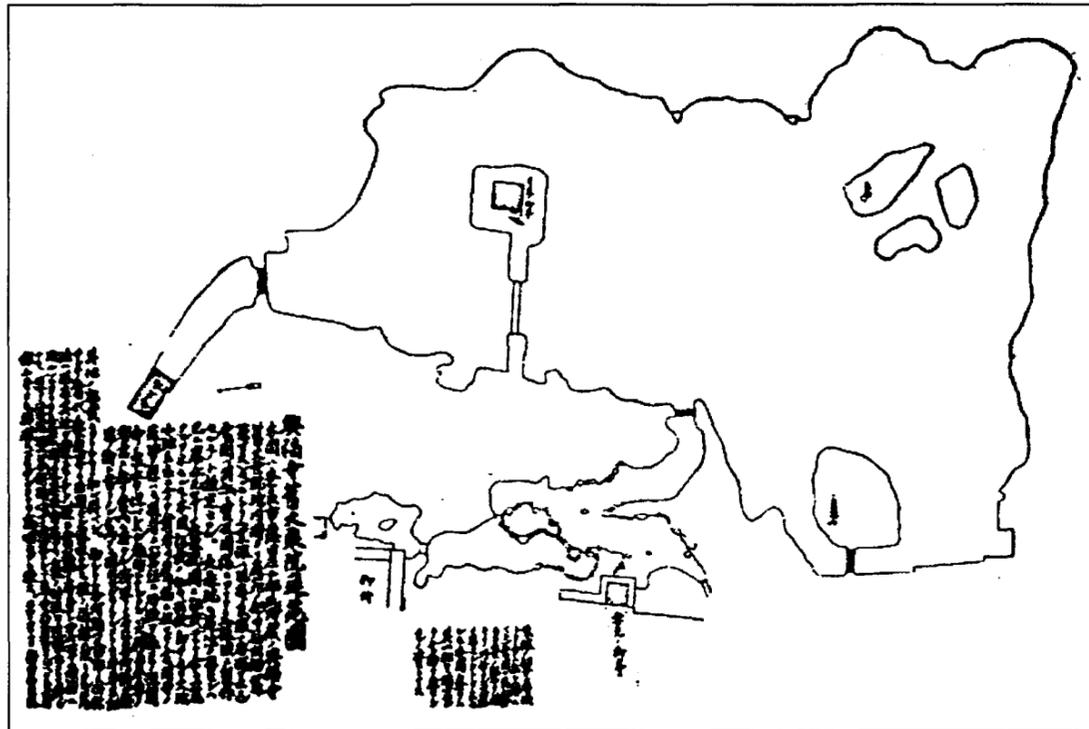


図3 『興福寺旧大乘院庭苑図』(昭和14年「庭園」第21巻第3号より)

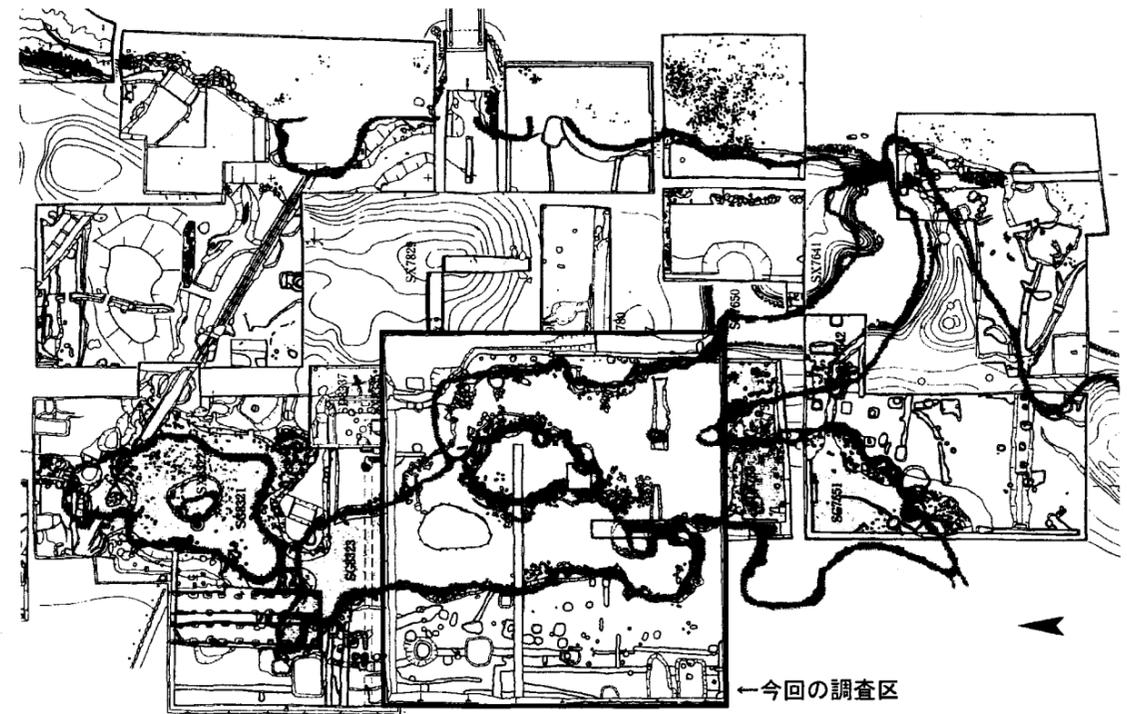


図5 これまでの調査区と西小池推定位置

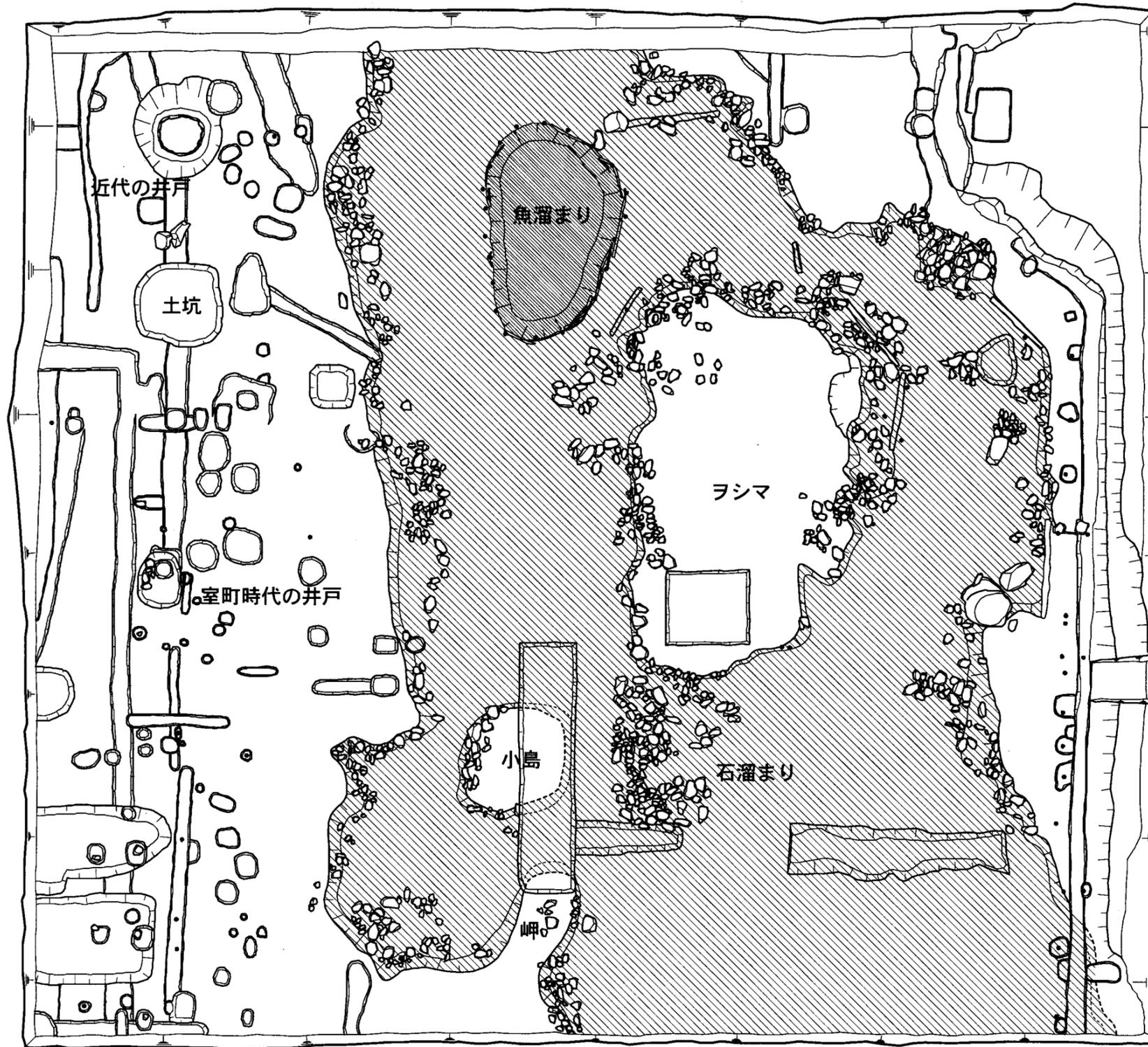
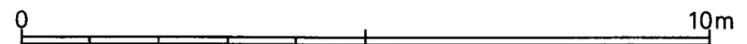


図6 北区遺構平面図 S=1:100



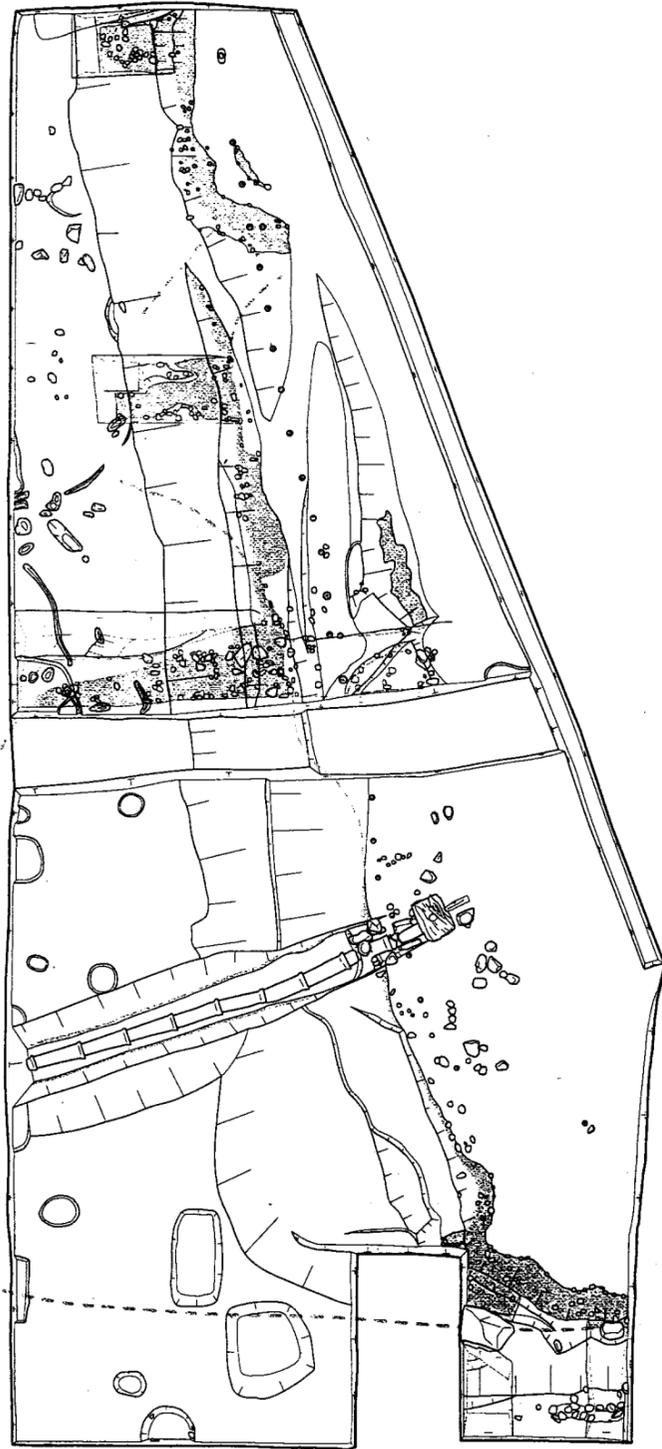


図7 南区遺構平面図（2003年度検出面）

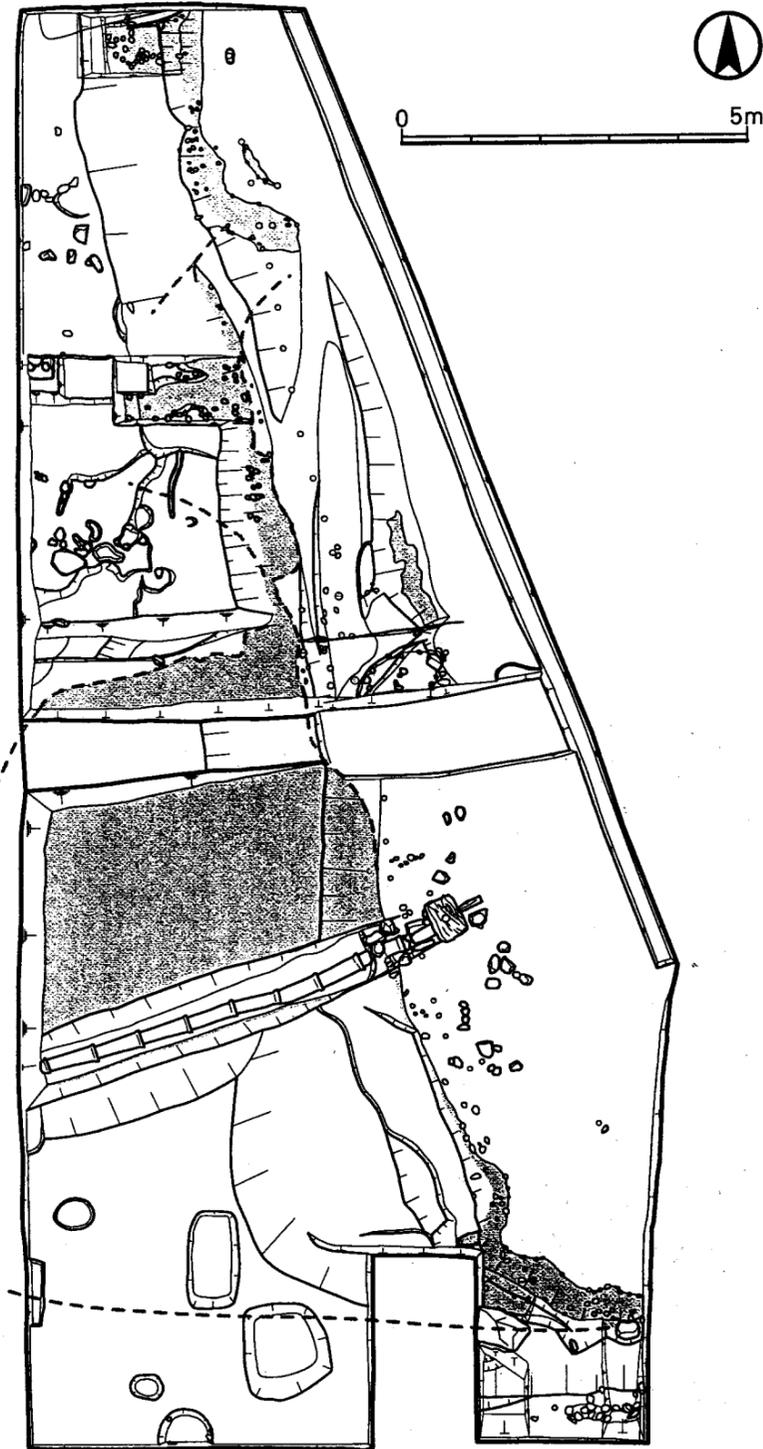


図8 南区遺構平面図（今回の検出面）

大乘院関係略年表

- 康平元年（1058） 成源が元興寺別院の禅定院を当地に開く。
- 寛治元年（1087） 隆禅が興福寺の北方（現在の奈良県庁舎付近）に大乘院を開く。
- 永久2年（1114） 禅定院を大乘院の頼実が兼務し、禅定院の堂塔を建設。
- 治承4年（1180） 平重衡の南都焼討により大乘院炎上。
- 養和元年（1181） 大乘院、禅定院のあった当地に移転。
- 宝徳3年（1451） 徳政一揆により伽藍の大半を焼失、翌年より復興開始。
- 寛正4年（1463） 尋尊、善阿弥に作庭を委ねる。

※江戸時代…中世の庭園を基礎に手を加え、景観を整える。

- 明治5年（1872） この頃までに大乘院は廃され、御殿は個人宅となる。
- 明治7年（1874） 建物の一部を学舎（更新舎・後に鶴小学校と改称）とする。
- 明治16年（1883） 建物の跡地に、飛鳥小学校が開校。
- 明治33年（1900） 飛鳥小学校が当地より移転。
- 明治38年（1905） 外国人用のホテル建設が決定する。
- 明治42年（1909） 奈良ホテル開業。
以後、昭和30年頃まで奈良ホテルの敷地として利用される。
- 昭和33年（1958） 国鉄の保養宿泊施設が建設。
旧大乘院庭園、国指定名勝に指定される。
- 平成15年（2003） 名勝の追加指定を受け、保養宿泊施設が撤去される。